

[巻頭言]

名和聖高教授の退職記念号に寄せて

岩崎 正弥 (地域政策学部長)

Preface to a Special Number in Honour of Professor NAWA Kiyotaka

Masaya Iwasaki

名和聖高先生が2018年度末をもって本学を定年退職されることになりました。1998年に国際コミュニケーション学部の教授として赴任され、2011年からは新設の地域政策学部教授として、合計21年間の長きにわたり本学の教育・研究・大学運営等にご尽力いただきました。とりわけ大学運営では、愛知大学常務理事・副学長(経営担当)、大学評議会委員・愛知大学評議員、財務委員長、広報戦略委員長、就職委員長など多岐にわたる重職を歴任され、地域政策学部開設のための設置委員長もお務めいただきました。詳細なご経歴は別途示されますので、ここでは私が特に印象深かったことを書き留めたいと思います。

名和先生の本学部でのご担当科目は「国際ビジネス論」「国際通商政策論」「経営法務論」等でしたが、本学に着任される前は在日マレーシア大使館、社団法人国際商事仲裁協会(現・一般社団法人日本商事仲裁協会)に勤務された後、NIC名和国際コンサルタントを主宰されるなど、国際ビジネス関連畑の専門業務に従事されていました。豊富な国際経験をもとに、地域政策学部の掲げる「地域」に関して、つねにグローバルの視点との重なりで地域を見る必要性を強調しておられました。本学部の英語名称はFaculty of Regional Policyですが、Globalの問題をRegionにおいていかに把握するのか、「地元」ではない「地域」の捉え方をいつも問題提起されていたように思います。地域の本質という問題を掘り下げて議論することは出来ないままでしたが、私の頭には名和先生の問題提起がいつも駆け巡っています。

名和先生は近年、インドシナ半島5カ国を跨いで

流れるメコン川流域諸国の経済圏(大メコン圏経済回廊)のご研究に注力されています(本ジャーナルでも本号ほか第5巻第2号〔2016年〕を参照)。このご研究自体について私が言及することはできませんが、国境を跨ぐ壮大な大メコン圏というRegionと、例えば日本の一県内で完結する豊川流域圏という小さなRegionとは、その空間規模や風土、民族、政治、経済、文化、歴史等々大きな違いがあると同時に、違いを越えて共通する性格があると思われる。それは越境性でしょうか。この越境性に関わって、縁辺地域の政策不在(空白)を埋めるべく「越境地域政策」という切り口で研究を進めてきたのが愛知大学三遠南信地域連携研究センターでしたが、名和先生は毎年同センターの「研究フォーラム」で報告をされてきました。ボーダーを越えて移動するヒト、モノ、カネ、情報等の動きは、地域の本質を分析・考察する上で極めて重要な要素だと思われる。

この越境性を地域の本質だと考えた場合、どんな地域であっても多かれ少なかれグローバルを含みこんでいます。しかしこれは当たり前の現実であり、おそらく課題はここから始まります。そうした地域(圏)に対して、研究者としてどうやって「地域を見つめ、地域を活かす」(地域政策学部のポリシー)のかが問われます。本学部は専門を異にする6コースを抱え、この専門の多様性が特色となっています。さらには地域に対する分析手法も、客観的な分析を前面に出す「地域科学」「政策科学」的な手法から、むしろ当事者性を重視してフィールドワークを進める「民際学」的な手法まで、本学部では多様なアプローチを内包しています。この状態は多方面

から地域を捉えることができるという意味では利点だと思うのですが、もし仮に何か特定のテーマをもって共同研究する場合、例えば「地域（圏）自立のための政策」というような目指すべきテーマを設定したとき、多様性を相互の繋がりがなくまま留める（＝雑多）だけでいいのでしょうか。私には多様性を串刺す軸（それは教員相互の共通認識かもしれませんが）が必要だと思えるのです。勝手に私が自分の問題意識で押し広げてしまいましたが、名和先生はこうした課題を刺激する問題提起を、グローバルの視点を通してつねに意識しておられたように感じています。

地方創生の掛け声が一段落し、至る所で問題が吹き出している今こそ、地域政策の問い直しが急務です。こうしたことを名和先生のご退職をきっかけに改めて考えています。併せて名和先生のますますのご活躍を祈念しています。